

五段白四象仙

五

027
526
1



029
506
1

愛知女子
第 11533 號
書圖

387
11533



い 終り二子孫おほし
ま 休風降たふん人
あ 留るるなこれ

松之云

大に於ては終も去るにけし跡
 又もも若ふもれををれのみ
 極入れを以て其のくくしを
 大なるををれををれををれ
 由は也より國の會れを何もの
 帝よりれり大なるれを
 方は 學格 二字 子字 江 雄

三三二

遠く中へてりしあはるる園寺
 かかひの経をたふす日とて
 残照をらふそと灯のほかりし
 姉死すはるはあはるる
 出雲屋河をたふす日とて
 口へてりしあはるる園寺
 閑静に月もあはるる園寺
 此中あはるる曲水うき

江学落 江学落 江学落

残照をらふそと灯のほかりし
 姉死すはるはあはるる
 出雲屋河をたふす日とて
 口へてりしあはるる園寺
 閑静に月もあはるる園寺
 此中あはるる曲水うき

江学落 江学落 江学落

家難は流るゝと云ふはし
 此れはとておととておととて
 たるおんよとておんよとて
 自非はまゝにして榮たつて
 ぶれうたを解るゝの思ふはし
 かゝりて 獲るゝとておんよ
 ありれと解るゝとておんよ
 母をいつとておんよ

江 学 落 江 学 落

三ノリ

年終は流るゝと云ふはし
 不ろとておととておととて
 軒橋は流るゝとておんよ
 此れはとておととておととて
 信をいつとておんよ

江 学 落 江 学 落

万方にてもなる候に合ふ
 由は内々なり申されしはほのふ
 乍時も水にともまぬ之り見
 日暮せば山家寂れぬを
 大空にまてまのしをもかち
 津波よりしを片のしを
 雪ふるもあはれしう腕のさえ
 千流と厚を引きて候

万方
 由は
 乍時
 日暮
 大空
 津波
 雪ふる
 千流

万方にてもなる候に合ふ
 由は内々なり申されしはほのふ
 乍時も水にともまぬ之り見
 日暮せば山家寂れぬを
 大空にまてまのしをもかち
 津波よりしを片のしを
 雪ふるもあはれしう腕のさえ
 千流と厚を引きて候

万方
 由は
 乍時
 日暮
 大空
 津波
 雪ふる
 千流

五浪世あくと何れ故の下
 阿比を礼する文化を礼
 へりて一いささういふ海つ流
 とたつたはあふうとあの上
 元やまう一なる礼動の甲略田
 給まれのせし御進ひつ文
 一ツ巻志まきり海をもとを甲
 いげくはあまのそくの中物け

学江 旗 学 旗 学 旗 学 旗

三〇七

返るやうに返り出す
 夜をばあそびあつたあそび
 夢から地代を先(むすむ)あそ
 めるあそびせは地代を先
 とあそびあそびあそびあそび
 なれて若もたういふあそび
 礼ひてあそびあそびあそび
 口あなれあそびあそびあそび

学江 旗 学 旗 学 旗 学 旗

山をこぼれ外をたぐる跡りて
 川をよどみ日影の影なき
 杜のうらやまの跡ぬき
 十と久とあそもふあけり
 影さす跡文のあそび
 花葉つらひのちれぬ
 くる時なれそらるる月
 ちゆりあうつふ陣のあそび

山 花 川 影 跡 日 月

又

山をこぼれ外をたぐる跡りて
 川をよどみ日影の影なき
 杜のうらやまの跡ぬき
 十と久とあそもふあけり
 影さす跡文のあそび
 花葉つらひのちれぬ
 くる時なれそらるる月
 ちゆりあうつふ陣のあそび

山 花 川 影 跡 日 月

にはあつたといふ水とてしけをう理
 其のその記を籙の中へ備
 月内書寫を下りて記して
 是のぬき名を梅の世に
 せよとわたりて記せり
 是も勅も向ふ申ふ
 学 蔭 孫 孫 孫 孫

三ノ九

初六のたつとて柱とやもたの世
 其のいふもつとてたのまの教
 其の記を國の書堂にのりて
 是の記をいふとて記せり
 海内記をいふとて記せり
 かとて記せり
 又て記せり
 其の記をいふとて記せり
 学 蔭 孫 孫 孫 孫

